

子育て・発達支援グループ「のびのびクラス」 2007年度5月～9月活動報告

植田 有香 上野 恵加 大宅 洋行
佐脇 亜依 神澤 創 宮川 治樹
平井 純子

第1章 のびのびクラス概要

現在、子どもたちの中には不登校や引きこもりなどのような、不適応による問題が多くみられる。このような問題が起こる原因の中でも重要なもののひとつに、子どもたちが学校での人間関係に関するストレスを処理しきれていないことが挙げられる。実際、子どもたちは人間関係にまつわるストレスを強く感じているといった報告もある（長根，1991）。とくに社会的場面での行動につまずきを持つ子どもの場合、人間関係に関する問題が顕著に現れることがある。たとえば、相手が迷惑な顔をして読み取ることができず、周りの雰囲気に合わせて行動ができなかったりする。それにより、仲間関係が築きにくい為、疎外感を感じたりする場合がある。さらに、小学校では子どもの指導・教育は学校が主体となっているが学校業務の多様化や教師の多忙さ等により、学校側だけでは対応しきれず子どもがストレスフルな状態になっていたり、意欲低下や自信喪失などの2次的不適応も起こりうる。

そこで、2006年10月より、帝塚山大学では、文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」による「心のケアとサポート」の取り組みの一つとして、社会的場面での行動につまずきを持つ子どもを対象にグループ活動を行った。ここでは、それぞれの子どものペースで同じタイプの子どもと一緒に楽しみながら、社会的場面での適切な対応や言葉掛けを学習する子どもグループと平行して、その保護者のグループ活動ときょうだいの保育も行われた。2006年度は8名の子どもとその保護者が参加し、1グループでの仲間づくりを目指した活動を行い、2007年度からは子どものタイプに応じてグループを2つに分け、活動を行った。

(1) 期間

グループの活動は2007年5月から9月（8月を除く）までの期間において、月2回、各60分間の活動を全8回行った。

(2) スタッフ

子どもグループのスタッフは、臨床心理士と臨床心理学専修大学院生、および心理学科学部生からなる。活動中は、全体を統括するリーダーが1名、それぞれの子どもに対して1名のスタッフが配置され、リーダーの補助者と観察者各1名を配置した（図1）。保護者グループは、ファシリテーターが1名（大学教員）、コ・ファシリテーターが1名（大学院生）である。また、きょうだいの保育は学部生1～2名が担当した。

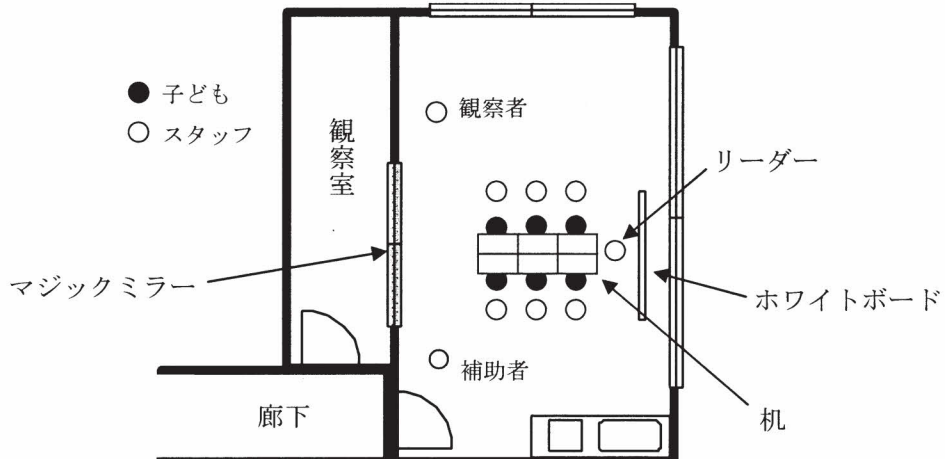


図1 プレイルームの間取りと子どもグループ活動時のスタッフの配置

(3) グループ

*子どもグループ

子どもグループは、グループ活動を通して、コミュニケーションの能力、社会的場面におけるルールの理解といった適切な対応やスキルの向上を目指し、発達を促していくことを目的としている。子どもの課題となっている行動特徴によりグループを2つにわけ、積極的な発言や協力などを目標とした「たんぼぼグループ」、衝動性のコントロールや協調などを目標とした「ひまわりグループ」とした。対象児は小学校1～4年生であり、1つのグループの定員を6人程度に設定した。

活動の流れは、「始まりの会」を約10分間行った後に、各グループの特徴に沿ってねらいを定めたゲームや制作を約40分間行う。最後に「終わりの会」を約10分間行い終了となる。また、目標として、グループ全体の目標と、それぞれの子どもに個別の目標を設定した。この目標を「始まりの会」で意識づけ、プログラムを行った後、「終わりの会」でふりかえりを行った。

*保護者グループ

保護者グループは、毎回のプログラムは特に定めず、スタッフの介入も極力減らすことで、親同士が自由に話し合える場とした。中心となる話題は各回によって異なり、子どもや周囲の事、困り事や心配事、自分に関する気がかりな事などを話していた。保護者グループは、このグループに参加することをきっかけとして親同士が主体性をもって、長期的に支えあっていけるような関係づくりを目的とした。各回の開始時に、子どもグループ担当者が作成する「のびのびニュース（前回の子どもの様子や各回のプログラムを記入した便り）」を配布し、子ども達が別室で行っている様子をコ・ファシリテーターより伝えた。また、参加者自身の気付きを促すために、毎回の活動の終わりに「ふりかえりシート」に記入してもらい、自分自身や子どもについて、そして学んだことなどいくつかの質問に答える形で、自分自身の気持ちについてふりかえる時間を設けた。

*きょうだいの保育

のびのびクラスへは、きょうだいと一緒に来ることが多く、保護者が安心して活動に参加できるよう、別室できょうだいの保育を行った。また、きょうだいにとって楽しい時間になるよう、部屋にはきょうだいの年齢や興味に配慮したおもちゃを用意し、学生スタッフと遊んで過ごした。

第2章 たんぼぼグループ活動内容

1. 子どもグループ

たんぼぼグループでは、小学校1～3年生の6名の子どもを対象に、積極的な発言や協力を目標としたプログラムを実施した。全8回の活動での短期目標として、前半では「子ども同士の関係づくり」、中盤は「他の子どもへの注目」、そして後半に「みんなの前での発言」を設定した。毎回のプログラムは、この短期目標を中心的なテーマとし、それに加え、それぞれの子どもの個別目標を取り入れて作成した。

表1 子どもグループ（たんぼぼグループ）の活動内容

活動	ねらい	内容
1回目	メンバーを知る クラスへの意思づけ	スピーチ 役割決め・アマゾン
2回目	関係作り 協力	人間知恵の輪 アマゾン
3回目	関係作り 協力	フープくぐり オールアボード・アマゾン
4回目	関係作り 協力	20問クイズ・フープくぐり オールアボード・手形づくり
5回目	協力 友達との関わり方	20問クイズ・絵あてゲーム ころがしドッジボール・七夕（短冊づくり）
6回目	協力 友達との関わり方	20問クイズ・絵あてゲーム 役割決め・ころがしドッジボール
7回目	協力 負けの受け入れ	20問クイズ・絵あてゲーム ころがしドッジボール・フルーツバスケット
8回目	協力 共有	20問クイズ・【プラバン作り】 【修了式】

※【 】は、保護者、きょうだい、と共に活動したプログラムである。

1, 2回目の活動では、子どもが個別にゲームを遂行したり、みんなの前で発表することに困難を示す様子が多くみられたが、回を重ねるごとに少しずつ他者を意識し合いグループとして活動していった。また、中盤から行った「20問クイズ」では、それぞれの子どもの意見をグループ全体として1つにまとめる場面で自分と他児の意見が異なったときに、相手の意見に納得ができると、自分の意見を譲歩するという様子も徐々に見うけられた。

グループ全体に対して、「そわそわしない」「順番をまもる」「手をあげて発言する」という3つの目標と、一人一人子どもに対する個別目標をホワイトボードに提示した。さらに、それぞれの子どもの個別目標に対して、プログラムの最後の「ふりかえり」時に、子ども自身が自分の行動を評価する機会を設け、「できた」と納得した時にはシールを貼っていった。そして、4回目と8回目では、頑張ったごほうびとして、獲得したシールを消しゴムや定規などの文房具と交換した。これらには2つの目的があり、1つには子ども同士が楽しくプログラムを進めるための枠を決めることにある。グループ全体に対しての目標を1人の子どもが守られなかったときにプログラムが止まってしまうこともあり、そのようなとき視覚的に提示された目標を促すことにより、子ども同士の小競り合いや、強制的にプログラムに従わせることなく活動が行われることもある。そしてもう1つの目的は、目標を遂行しようという動機づけと維持である。個別目標は必ずしも遂行できるとは限らない。しかし、子どもが自分自身を振り返ることでその個別目標に対して注目することになる。また、前回のプログラムでシールを獲得できなかった子どもも、次の回には文房具の獲得を目指して、がんばろうという気持ちから、個別目標に注目するようになる。

たんぼぼグループでは、どのようにするとグループ全体で楽しめるかということ、子どもとリーダー共に考えながら活動を行った。まず子ども個人の目標の達成をスタッフが支え、そこからグループの中における個人の発言を子ども同士が尊重し合える場所づくりに重きを置いた。

2. 保護者グループ

グループが始まった当初は沈黙する場面も見られたが、一度話が始めるとスムーズに会話が進んでいった。1～3回目では、子どもに関する心配事やこだわり行動、診断名がつくことによるのメリット・デメリットなどが話題に挙がった。とくに子どもに関する話題が圧倒的に多く、子どもへの対応や学校生活での困っている様子が伺えた。また、親同士が体験談を語り、不安や悩みを述べた親をフォローしようといった動きもしばしばあった。4回目では、親が自身に眼が向けられるようになったのか、「不安」というキーワードを出してきて、他の親がフォローするといった場面も見られるようになる。また、それまでネガティブな発言が多かった親が、他の親のフォローをすることもあった。さらに5回目では、学校の対応や担任の不満についての話題にも触れることがあり、それぞれの親の本音が出てきたなと感じることもあった。6, 7回目は、きょうだいや友達についての話が中心となっていた。子ども同士のコミュニケーションの話から、親子や夫婦間のコミュニケーションへと発展していき、「私(母親)が元気だと家族も元気」という言葉も出てきた。8回目は最終回ということもあり、ファシリテーターから「何か良いことはありました？」という問いかけがなされた。それぞれ「父親が今まで"反応"していたのが"対応"

に変わり、子供に対する見方が変わったなと感じるようになった」や、「妹とよくもめて叱られていたのが、だんだん学習してきたのか、物分りがよくなった」などという話が出てきた。

この全8回の活動を通して、親に変化がみられた。これは、自分だけが悩んでいるのではないことがわかったり、話を安心して出せる場であったことにより起こったのかもしれない。これによって、子どもの具体的な困りごとにとらわれていたのが、親自身について内省ができ、他の視点からも子どもを見ることができるようになったり、また本音で話ができるようになっていったのではないだろうか。そこから、子どもの困りごとだけでなく成長した面を喜び、子どもを含めた「家族」としての視点も出てきたのではないだろうか。こういったことができたのは、やはり親グループが、情報を共有できる場所であったこと、受け止めてもらえる場所であったこと、そしてそのことにより、親同士の繋がりが深まったからなのではないだろうか。

第3章 ひまわりグループ活動内容

1. 子どもグループ

ひまわりグループでは、小学校1～4年生の男児4名を対象に、衝動性のコントロールや協働行動の獲得を目標として活動を実施した（表2）。短期的な目標として、前半は「子ども同士の関係づくり」、後半は「他の子どもとの協力」を設定し、「ルールを守る」や「負けの受け入れ」をプログラム実施の上で中心的なテーマとした。また、子どもとスタッフが全体で共有する目標としては「みんなで楽しむために…見る、聞く、待つ」を設定した。そして、活動内容は、集中力の持続が難しいことなど参加する子ども達の特性を考慮して、体を動かすゲームや工作を意識的に取り入れ、1つ10～15分で終わるプログラムをいくつか組み合わせる構成とした。

表2 子どもグループ（ひまわりグループ）の活動内容

活動	ねらい	内容
1回目	クラスへの意思づけ メンバーの意識づけ	グループのルール・役割決め 写真を撮る・ネームパス・ころがしドッジボール
2回目	メンバーを知る 名前を覚える	スピーチ「好きな遊び」 相撲ごっこ・手形づくり
3回目	関係づくり 協力	スピーチ「家族の紹介」 ボール運び・ころがしドッジボール・手形づくり
4回目	関係づくり 友達との関わり方	ロールプレイ「あったか言葉・ちくちく言葉」 フープくぐり・ゴムジャングル・七夕(短冊・飾りづくり)
5回目	関係づくり 友達との関わり方	ロールプレイ「あったか言葉・ちくちく言葉」 夏祭り準備（ゲーム体験・担当決め）
6回目	協力 役割の遂行	20問クイズ・ころがしドッジボール はっぴ作り・【夏祭り】
7回目	自分のことを伝える 負けの受け入れ	スピーチ「夏休みのこと」 プラバン作り・何でもバスケット
8回目	協力 共有	クッキング「ベビーカステラ」 【パーティ】

※【 】は、保護者、きょうだい、と共に活動したプログラムである。

ゲームや工作では子ども達が協力する場面やルールを設け、その中でスタッフは子どもの言動や子ども同士の関係に着目した。子どもによって様々な不適応的な行動が見られたが、それに対して子ども担当の学生やリーダーは、行動の制止、子どもの気持ちの受容や状況理解の促し、また子どもによっては代替行動を伝える等の対応を行った。「ころがしドッジボール」では、ボールに当たるとコートの外に出て30秒待つといったルールを設定したが、はじめ外に出ることを嫌がり泣いて怒った子どもがいた。しかし、何度かゲームを行ううちにルールを理解し、外で待てるようになった。さらに、他の子どもへの攻撃行動や暴言をグループの課題と考え、「ロールプレイ」のテーマとして間接的に取り上げた。ロールプレイは人形を使っていくつかの行動パターン（働きかけ方、言葉の使い方：あったか言葉・ちくちく言葉）を提示し、それが適切であるかどうかを子ども達に尋ねた。他児への攻撃行動や「ふとっちょ」といった言葉などを例として用いたが、子ども達はそれを不適切と判断し、適切な働きかけのロールプレイに積極的に参加した。参加したからといって必ずしもスキルを習得したとは言いきれないが、練習した「ねえ、ねえ、〇〇くん」といった働きかけを行っている場面も見られた。さらに、保護者と交流する機会を設けており、「夏祭り」では魚釣りコーナーなど4つのコーナーをそれぞれの子どもが担当し、保護者やきょうだいを招待した。実施するにあたって準備の回を設け、その回の中でまずは子ども自身が「夏祭り」を体験し、また保護者への招待状作りを行うなどして、子ども達が自分自身で「夏祭り」を進める意識を高めた。担当を決める時にひとつのコーナーに人気集中したが、けんかにならず子ども同士で譲り合うことができた。「夏祭り」本番では、子どもと保護者の全員で楽しむ雰囲気生まれた。保護者が自分の子どもだけではなく、他の子ども達とも関わり、コーナーから離れていた子どもにも適切な対応を行っていた。ひまわりクラスでは、不適応的な行動も多く見られたが、そういった行動に注目しすぎず、子ども達の適切な言動は褒めて、子ども達の長所や「みんなで楽しむこと」を大切にされたグループ運営を心がけた。上記で述べた適切な行動の獲得ももちろんだが、活動を通して子ども同士がお互いを気にかけて、仲良くなっていく様子も見られた。学校を離れた自由な雰囲気の中で、子ども同士や親子がお互いを認めながら素直に関わり合う時間になっていたのではないだろうか。

2. 保護者グループ

このグループでは、メンバーが揃いにくく、4回目で初めて参加者全員が顔を合わすこととなった。初回から、一人のメンバーが他の親の話す出来事や不満、心配事に共感し、子どもとの関わりや自分自身について見直しながら自らの経験を伝えていく様子が目立った。そして、全8回のうち前半の「ふりかえりシート」の中で1番多かったものが「同じことで悩んだりしている」といった内容であった。この場で話す中で、具体的な解決策が見いだせなくとも、自分だけが悩んでいるのではないという安心につながっていたのではないだろうか。そして、「話をする人がいるというのは、救いになる」といった記入から、自分の思いを話すことができる相手が必要であると気づききっかけになったことが伺える。またこれらを踏まえて、それぞれの親にこの場では、他の場では話し辛い内容も話すことができるという意識ができていたのであろう。

後半では、1つ1つ話題が具体的に話された。ファシリテーターからもメンバーが話した対応策などをまとめて伝え返すということがみられた。ある親の学校への対応方法の話が他の親にとって参考になったために、次の回にも続けて同じ話題で話し合われた。その話を通して、今まで発言が少なく聞くことが多かった親が、参考書から知識を得ていこうと思い、次回までに本を読み、障がいに対する先入観が変わったことも伝えられた。グループ内での話から、それぞれの親がどのような思いを持ち帰ることができたかは異なる。しかし、様々な意見を聞くことにより自分と子どもとの関係をもう一度見つめ直すという時間になっていたのではないだろうか。また最後の振り返りシートで、あまり話さなかった親が、他の親と「話せてよかった」と記述されていた。このことは、この親にとって大きな一歩であったと考えられる。最後の回でもいつも通りの話し合いが行われ、「子どもとの意地の張り合いについて」が最後の話題となった。子どもと親との感覚の違いというキーワードが挙げられ、どちらがどう悪いというのではなく、その違いを認めあっていくことが大切なのだということが話し合われた。このグループは、こういった感覚について考える場となっていた。

第4章 まとめ

のびのびクラスでは、それぞれのグループでの関係作りを大切にしてきた。活動を通して、子ども同士のつながりだけでなく、親同士のつながりもみられた。

子どもたちはのびのびクラスで活動するよりも多くの時間を小学校で過ごしている。この全8回のプログラムが終了した後、保護者に対して行う事後面接の中で、明るい表情で元気に通学しているといった話も聞かれた。これらのことは、のびのびクラスへの参加効果だけによるものとは言いきれないが、少なくともその大きな要因のひとつになっていたと考えてもさしつかえないであろう。

今後の課題としては、のびのびクラスで子どもにみられた適切な言葉かけや行動を、日常生活場面でいかに活用できるかといったことが挙げられる。そのためにも、この課題にそったプログラムを検討していく必要があるだろう。

文 献

- 井ノ崎敦子・小西浩嗣・平井純子・中地展生・野村恭代・三木善彦 2006 心のケアセンターでの3グループの活動実績 ―現代GPの取組の一環として― 帝塚山大学心のケアセンター紀要第2号, 33-34.
- 平井純子 2006 子育て・発達支援グループ「のびのびクラス」活動報告 帝塚山大学心のケアセンター紀要第2号, 43-45.
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析 ―小学4, 5, 6年生を対象にして― 教育心理学研究39, 182-185.